

レオン王国の靈廟

2014年9月20日（土）

東京外語大学本郷サテライト

# ロマネスク壁画に魅せられて

「解放された民衆のエネルギー」

発表者 遠藤雅昭

- 1 はじめに
- 2 サン・イシドロ教会（レオン王国の靈廟）の壁画
- 3 「伝統の厚み」
- 4 ロマネスク美術の歴史的背景
- 5 解放された民衆のエネルギー
- 6 ロマネスク美術から今を考える





ANGE  
LV S  
P AS  
TORES



巡礼路



「羊飼いの告げ」

最初にロマネスク美術に興味を持つようになったのはバロセロナのカタルーニア美術館からです。写真はスペイン広場から見た美術館です。

美術館の正面玄関を入ると左側がすぐにロマネスク美術の展示室となり、カタルーニア地方の各地から集めた素晴らしい作品が多く集められています。カタルーニア地方の文化

が、絵画では、ゴヤ、ピカソの絵を観るのが主なテーマでした。しかし、途中からロマネスク美術の虜になってしまいました。サンチャアゴ・デ・コンポステラ、レオン、ブルゴス、サント・ドミンゴ・デ・シロス修道院、パンプローナと巡礼路の逆コースを辿るうちに、その思いを強くしていきました。

1 頭に焼き付いて離れないそんな絵に出会うときがあります。

サンティアゴ巡礼路の要所だった古都レオンに、ロマネスク様式のサン・イシドロ教会があります。

その教会にあるレオン王国のパンテオン（王家の霊廟）の天井に描かれたフレスコ画『羊飼いの告げ』に私は魅せられました。

昨年、イベリア半島を巡ったのですが、絵画では、ゴヤ、ピカソの絵を観るのが主なテーマでした。しかし、途中からロマネスク美術の虜になってしまいました。サンチャアゴ・

『全能のキリスト』  
タウイのサン・ケリメン聖堂の



を残そうとする意気込みに感心しました。

ピレネー山麓各地に点在する小聖堂から集められた壁画が何室にもわたって展示されています。しかも、各部屋には作品が残されていた教会内部が再現されているのです。

この美術館の壁画の中で頂点にあたる作品『全能のキリスト』は鮮やかな色彩と力強い表現が目を引きま

す。地中海のような青の色がキリストの威厳を高めています。

でも、どこか愛嬌のある、親しみやすい雰囲気を持っていてロマネスクらしさを感じます。

サンタ・マリア聖堂の『聖母子』



バロセロナのカタルーニア美術館

カタルーニャ美術館のコレクション

2

ロマネスク

美術では世界有数のコレクションを誇るこの美術館。祭壇画、装飾品、木彫の聖母子像やキリストの磔刑像などは、素朴ながら強い表現性を感じます。

祭壇板絵の『キリストと使徒たち』は色彩が鮮やかで赤、黄、青のコントラストの効果で華麗な板絵となっています。

柱頭、石像は、展示数こそ少ないのですが、粒ぞろいの作品が多くありました。



キリストと使徒たち



### 3

バルセロナを過ぎるとロマネスク美術への関心は薄れ、ゴヤなど巨匠の作品を求め歩いていましたが、ロマネスク美術を改めて意識したのは、キリスト教の三大聖地であり、巡礼の最終目的地であるサンティアゴ・デ・コンポステーラのカタドラルです。

九世紀頃、発見された聖ヤコブの墓の上に教会が建てられ、その後、増改築が繰り返され、大聖堂が造られました。スペイン有数のロマネスク様式の教会ですが外観はバロック様式に改められました。正面の右側に博物館があり、ロマネスク美術が展示されています。

この博物館は、彫刻、柱頭などが多く、カタローニア美術館の柱頭の怪物などにも言えますが、キリスト教以前からある異教的な文化や土着的な文化がキリスト教文化と共存し融合しているようです。

ここでも、ユーモラスで、愛らしいロマネスク美術の魅力を感じました。



カタドラル





サン・イシドロ教会  
(レオン王国の霊廟) その2

5

天井画は、前列中央のアーチに『荘厳のキリスト』その左右に『羊飼いへのお告げ』『キリストの黙示録』が描かれ、後列の中央に『最後の晩餐』その左右に『幼児虐殺』『受難』が配されています。

壁画は、中央奥から『磔刑』『子羊』『キリストの降誕』『お告げ』そして『エジプトへの逃避』と続きます。福音書の各場面を再現しているものになっています。

色調は、淡い黄色、薄赤色、薄緑、茶褐色などをベースとしたものです。勝峰先生から、色材のコスト上の制約から安価な絵の具を使用したと教わりました。カタローニアの壁画のように鮮やかさが薄れているのが少し残念です。

しかし、そうした色彩であるから、落ち着いた崇高さを感じられるのかもしれない。

『荘厳のキリスト』『羊飼いへのお告げ』は、ほぼ良い状態で保存されていますが、他の壁画は劣化が進んでいます。修復できたら良いなと思いました。



天井画 『キリストの黙示録』



天井画 『受難』



天井画 『最後の晩餐』



壁画 『磔刑』



壁画 『お告げ』



壁画 『子羊』



壁画 『エジプトへの逃避』



壁画 『キリストの降誕』



天井画 『幼児虐殺』

サン・イシドロ教会  
(レオン王国の霊廟)  
その3

6

天井画のひとつ『莊  
嚴のキリスト』は、マ  
タイ、ヨハネ、ルカそしてマルコ  
の四記者がイエス・キリストに、  
それぞれの福音書をささげる場  
面です。

中央に座したキリストは、輪郭  
が鮮明で、力強く表現されてい  
ます。カタローニアの『全能のキリ  
スト』と同様に背景が青でキリス  
ト像を浮き上がらせています。

また、この壁画は、各記者の躍  
動感が見ものです。

パンテイオンの天井はアーチに  
なっているので、壁画の四隅は柱  
で支えられています。その柱には  
柱頭があり、その上からアーチ状  
に天井画となっています。

四隅に位置している記者の画像  
は、カーブを描き末広がりになっ  
ていきます。

したがって、平面に投影された  
絵を見るよりも、記者が上に延び  
ようとする印象となり、壁画の前  
に立つとずつと躍動的に感じます。



獅子のマルコ



柱頭からのアーチ



天使のマタイ



牛のルカ



鷲のヨハネ



『羊飼いへのお告げ』（レオン王国の霊廟）

7

ついにやってきました。ロマネスク美術の魅力を強く思い知らされた『羊飼いへのお告げ』です。

キリストの降誕を大天使が羊飼たちに告げる場面（ルカ福音書）を表したものです。

羊飼いは三人おり、そのうちのひとりには角笛を、ひとりにはシュリンクス（牧羊パンの笛）を奏でています。モーツァルトの歌劇「魔笛」でパツパゲーノが持っているパンフルートです。

もう、ひとりには番人に餌（白いのでヨグルトか）をやっている。

羊飼いたちが実に生き生きと描かれています。

家畜は、羊、山羊のほか牛もおり、丘の稜線が描き込まれ、大小の樹木も添えられています。

大天使は立っているのですが、動きがありません。神の世界から現れ、「こんには、



お話しがあります。」と羊飼いたちに明るく語りかけている感じがします。

『羊飼いへのお告げ』は、春の息吹や神の降誕の喜びを画面いっぱいに表し、春の祭典のようです。

また、アーチの内輪には、十二か月のそれぞれの月に、農民の働く情景が躍動的に描かれています。この『農業カレンダー』については、勝峰先生がこの場面を解説しています。「九月の労働」は「葡萄の取り入れ」です。

この時代に、領主ではなく、脇役にしかすぎない民衆の姿が壁面に登場すること自体が、私には驚きで、すっかりロマネスク絵画の魅力に取りつかれることになりました。

（参考文献）『ロマネスク美術』

柳宗玄作選4（八坂書房）



「農業カレンダー」（レオン王国の霊廟）



アーチの内輪に描かれている「農業カレンダー」には、十二か月のそれぞれの月に情景が描かれている。

庶民の働く姿を躍動的に描いています。

- 一月 二つの顔を持つ男と二つの扉
- 二月 火で暖をとる老人
- 三月 葡萄の木を剪定する人
- 四月 二本の樹を植える人
- 五月 戦いに行く馬上の人
- 六月 大麦を刈る農夫
- 七月 小麦を刈る農夫
- 八月 穀類をはたらく農夫
- 九月 葡萄の取り入れ
- 十月 豚にどんぐりを与える
- 十一月 豚の畜殺
- 十二月 火の前の台の傍らにいる人

『神の美術』（勝峰昭） 光陽出版

8

イスパニア・ロマネスク美術の特徴は、「鮮明な輪郭線と鮮やかな色彩で力強く表現していること」「自由闊達で、明るく、ユーモラスで、動きがあること」「民衆の生活描写が少なからず見出せること」そして「キリスト教以前からある土着的な、そして異教的な文化がキリスト教文化と共存、融合

していること」ように思います。

ロマネスク美術を動かす「伝統の厚み」

た。その時期に読

そして、その溢れるばかりのエネルギーに圧倒されます。

ロマネスク時代が歴史的に約二百年というほんの短い期間に過ぎないのに、このような特徴がヨーロッパの広範囲に、突然のように現れわたったのです。

私は、そこに時代を動かすような巨大なエ

ネルギーが内在しているに違いない。それは「伝統の厚み」だと思ったのです。

「伝統の厚み」とは、ケネス・クラークの著作『名画とはなにか』の言葉です。

三十年前に、システイナ礼拝堂のミケランジェロの絵画の前で、ほとんどの人が同じように感動している姿を見て、なぜ、なんだろうと感じまし

た。その時期に読

んだ本です。古い本ですが、イギリスのオックスフォード大学の教授で、ロンドンのナショナルギャラリーの理事でもあった著名な美術史家です。あらためて、この本を読んで見ました。

(次ページへ)

壁画・柱頭（レオン王国の霊廟）



柱頭





(前ページから)

その結果、人びとの栄養状態が向上しヨーロッパの人口は増大しました。

このような人口増大は、多くの労働力の拡大をもたらした、さらなる農業生産の増大をもたらします。

また、11世紀以降、耕地が農民に分与されて、その収穫の一部を現物や金銭で領主に納めるようになっていきます。農民の負担は、地代的な形に近づいていきます。収穫が増えれば、農民の取り分も増えていきます。

こうして、農民は、わずかながらの富の蓄積と社会的身分を確保していきます。

### (参考文献)

『中世ヨーロッパの農村世界』  
堀越宏一 (山川出版社)



現代の美術史学は、ロマネスク美術の怪物たちや周縁的人物たちを、当時の農耕社会の民衆がもっていた、キリスト教以前からの民衆の世界観の表象としても考察しています。

ロマネスク時代とは、農耕的地域社会の時代であり、キリスト教以前のからの異教的・土着的・民衆的的文化が、共存し融合していた時代でした。

中世においては、死は、社会的には、現在よりも遙かに身近な、生とすぐとなりにいるものだったのです。死は、現代とは異なって、社会的

現代の美術史学は、ロマネスク美術の怪物たちや周縁的人物たちを、当時の農耕社会の民衆がもっていた、キリスト教以前からの民衆の世界観の表象としても考察しています。

ロマネスク時代とは、農耕的地域社会の時代であり、キリスト教以前のからの異教的・土着的・民衆的的文化が、共存し融合していた時代でした。

中世においては、死は、社会的には、現在よりも遙かに身近な、生とすぐとなりにいるものだったのです。死は、現代とは異なって、社会的

現代の美術史学は、ロマネスク美術の怪物たちや周縁的人物たちを、当時の農耕社会の民衆がもっていた、キリスト教以前からの民衆の世界観の表象としても考察しています。

ロマネスク時代とは、農耕的地域社会の時代であり、キリスト教以前のからの異教的・土着的・民衆的的文化が、共存し融合していた時代でした。

中世においては、死は、社会的には、現在よりも遙かに身近な、生とすぐとなりにいるものだったのです。死は、現代とは異なって、社会的

### 死と再生の連続的循環

根本的に異なる楽しさであったのです。

『美術史と芸術理論』

青山昌文 (放送大学教授)

(放送大学教材)

## 12

もう一つ注目する点は、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼熱の高まりです。カトリック教会・教皇庁の上からの改革とともに、紀元千年以降、民衆の宗教的情熱が高まってきました。

予言されていた「千年の

終末」が無事に過ぎたことを契機に、聖地イェルサレム、ローマ、サンティアゴ・デ・コンポステーラの三大聖地への巡礼が増大します。

### 聖地への巡礼運動の高まりは民衆を巡礼へと突き動かす

取り次ぐ存在とされた諸聖人に対する崇敬でもありました。

それが、三大聖地への巡礼運動が高まるにつれて、民衆がローカルな聖人崇敬にとどまらず、最も

『ヨーロッパの歴史と文化』

「キリスト教と教会・修道院」

## 13

ロマネスク時代というのは、農業技術の発展によって、農業生産と労働人口が増大した時期でした。富が蓄積され、農民・民衆の生活にいくらかの余裕ができました。そのことにより、彼らの相対的身分が向上し、中世の民衆にわずかながら光があたるようになりました。

また、聖地巡礼運動の高まりは、民衆を巡礼へと突き動かす、その巡礼行によって、民衆は精神的な充足感を得るとともに、民衆の社会的な存在感が拡大しました。

これまで底辺の存在であった民衆が、世界の表舞台に登場した時代であり、民衆宗教運動の高まりが、一気に溢れだした時代です。こうした民衆のエネルギーが「伝統の厚み」の原動力となったと思います。

NHKの日曜美術館で俵屋宗達の特集があり、『風神雷神図屏風』を観たのですが、この絵は、ロマネスク美術と共通するところがあります。

また、この「風神」を観て、サン・イシドロ教会の壁画『羊飼いの告白』に登場する「大天使」を思い浮かべました。別の世界から今まさに出てきて、「やあ、こんにちわ」と言っているようです。「自由闊達で、明るく、滑稽で、楽しい」絵画です。

そして、NHKの番組は、社会学者の中沢新一さんの解説へと進み、私はその説明に強く同感したのです。

「今芸術を人類の歴史から捉え直そうという研究を行っている中

### 「解放された民衆のエネルギー」

解放された  
エネルギー。

沢さん。宗達の絵には現代に通じるメッセージがあると考えています。

宗達というのは安土桃山時代の終わり頃から江戸時代の初めを生きたとされている。

それは戦国の世が終わりを告げそれまで社会の底辺にうごめいていた町衆のエネルギーが一気にあふれ出した時代。宗達は脇役にすぎなかった風神雷神を主役にする事で、わき上がる時代の熱気を絵に込めようとしたのではないか。

後ろの方にある背景はみんなノイズだったわけですよ。

このノイズを立てた部分が、ずーっと浮上ってきて社会の前面に出てきて、そ



れが、その力が渦を巻くようにして町衆の文化というのをつくり出してきてます。

つまりそれまではノイズにすぎなかったものが背景にすぎなかったものあるいは下絵にすぎなかったものがそれはずっと前面に表れてきてこれは解放以外の何物でもないと思うんですね。

解放されたエネルギー。」

ロマネスク時代も民衆のエネルギーが一気にあふれ出した時代であり、同様なことが言えると思います。

中沢さんの言葉をお借りすれば、ロマネスク美術の「伝統の厚み」、そして、ロマネスク美術の魅力は「解放された民衆のエネルギー」の表出にあるのではないかと考えるに到りました。

## ロマネスク美術から今を考える

広い意味では、ロマネスク美術を理解することは、歴史的背景を理解ことでもありません。「あらゆる歴史学は現代史である。」

「あらゆる歴史学は現代史である。」と云ったのはドイツの歴史家エルンスト・トレンチでありますが、歴史学を美術史と入れ替えることができると思います。

「美術史家は現代の関心から過去を読み解こうとする。」

ひとつのテーマがさまざまに解釈され、ときには論争を巻き起こすのは、美術史家たちの現代の関心の持ちようが異なるからでもある。

真実はひとつしかないと考えるのは危険である。しかし事実を曲げることがあつてはならない。

その上で、過去についての考え方は多様である。その多様性から何を学ぶのか、そして自分はどう解釈するかは、今生きている自分とどう繋がるか、

がっているのか。一人ひとりが考えることも必要があるのではないか。」

と歴史家の草光俊雄氏は述べています。

そこで、私もロマネスク美術から今を考えてみようと思います。

「原発事故や核拡散・拡大への危機感、地球温暖化による急激な気候変動、日本を取り巻く国際状況の変化、所得格差の問題、若者に漂う将来への不安など、現代社会には、なかなか先を見通せないという閉塞感があります。」

その一方、どこかで現状を打開する芽吹きも感じるし、期待する思いもあります。

こうした現状だからこそ、ロマネスク時代とこの時代を重ね合わせ、ロマネスク美術の「解放された民衆のエネルギー」に私は思いを馳せるのです。」

勝峰先生は、『神の美術』のはしがきでロマネスク美術への関心の高まりについて、「ロマネスク美術のもつ特異な魅力もさりながら、今私たちが当面する世相があまりにも、『金銭の物質に心を奪われ過ぎ、そのために心が渇いてしまつて、人間の本当の幸せを見



『神の美術』  
勝峰昭  
(光陽出版社)